夫との関係と友人との関係が母親の育児意識に及ぼす影響について

教育学部助教授　飛　田　　操

問　　題

親にとって，子育ては，喜びや幸福の源でもあると同時に，負担を伴う，精神的・身体的な疲労の源でもあるといえよう。特に，現代日本において，子育てに密接にかかわることが多い母親にとって，子育ての持つこのような正と負の両価的な側面がどのような要因によって影響されているかを検討することは意味があることと考えられよう（平林・飛田，1998）。

子育てが母親にとって必ずしも肯定的な側面からだけではとらえられないことは，例えば，鎌田（1998）の，母親役割の受容には，その母親役割にともなう拘束感が伴うという指摘などからもうかがい知ることができる。

また，子育てが母親にとって肯定的でもあり，否定的でもあるという両価的な側面を有することは，例えば，青木・松井・岩男（1986）によっても示されている。彼らは，首都圏の10－15ヶ月児の母親90名に対する因子分析の結果，「子育ては負担だ」，「子育てにおわれて視野が狭くなる」といったコストや負担にかかわる育児の否定的な側面に対する評価や感情の因子と，「母であることに生きがいを感じる」，「母としての振る舞いは自分らしい」といった母親役割の取得や育児の肯定的側面に対する評価や感情とが独立した因子として抽出されたことを示している。

さらに，神谷（1998）は，乳児の泣き声に対する認知との関連から，育児ストレスは，「育児生活へのストレス」の他，「育児肯定感」に関する因子と，「否定的育児行動」に関する因子の３つの要素から構成されていることを示している。

このような育児への正負の評価や意識に影響する要因として，平林・飛田（1998）は，学歴（大日向，1982）や就労形態（柏木，1982；青木・松井・岩男，1986）といった「母親の要因」，第一子の年齢（青木・松井・岩男，1986）や末子の年齢（平林・飛田，1998）といった「子どもの要因」，そして，夫との精神的きずなや夫からのサポート（総理府青少年対策本部，1983；牧野，1982）といった「夫婦関係の要因」があることを指摘し，ただし，これらの要因は，実際には母親の学歴が夫からのサポートに影響したり，末子の年齢が母親の就労形態に影響したりと，相互に影響関係を持つことを仮定している。

平林・飛田（1998）は，これらの要因のうち，特に，夫からのサポートという夫婦関係の要因と，末子の年齢という子どもの要因に着目し，25歳から50歳までの母親に対する調査をしている。その結果，子どもの年齢にかかわらず，夫からのサポートを高く評定している母親は，低く評定している母親と比べて，育児の肯定的側面を高く評定し，否定的側面を低く評定していることを見出し，育児意識の肯定的側面に対しても，否定的側面に対しても，夫からのサポートの認知が重要な影響を及ぼしていると結論している。

しかし，夫との関係だけが母親の育児意識を左右するものではないという考えもあろう。

原田（1993）は，いわゆる『大阪レポート』の結果をまとめ，母親に不安をもたらす要因として，「母親の具体的心配ごとが多く，しかも未解決である」，「母親に出産以前の育児体験や子どもとの接触が不足している」という母親の要因，「夫の育児参加・協力が得られない」という夫婦関係の要因の他に，「母親に子どもの欲求がわからない」という母子の相互作用のパターンにかかわる母子関係の要因と，「近所に母親の相談相手がいない」という母親の社会的関係の要因とが存在することを示している。

また，佐々木（1996）は，神奈川県内および横浜市内に住む乳幼児を育児中の母親を対象に調査を実施し，母親の育児に関する不安など否定的な感情は，家庭内外の人間関係の希薄さや絶対量の乏しさに関係が深いこと，さらに，家庭の外に職業を持って働いている母親よりも，専業主婦の方が育児不安や育児への否定的な気持ちを訴えることが多いことを示している。

さらに，直接に育児意識をあつかったものではない

が，斉藤（1992）は，虐待をしている親は，親子の関係が密室の中で経過し，多少なりとも社会的孤立に悩んでいると指摘している。

このように，母親の育児意識については夫からの育児援助・サポートだけではなく，母親を取りまく対人関係の要因が重要になってくると考えられる。この対人関係要因の中でも，友人関係の要因は特に大きな影響を与えると考えられよう。

そこで，本研究においては，母親の育児意識を肯定的な側面と否定的な側面のふたつからとらえ，これら育児意識の評定に，夫との関係と，友人との関係の性質が及ぼす影響について検討する。

さらに，夫との関係と友人との関係が，母親の日常生活での悩み事や心配事に及ぼす影響についてもあわせて検討する。

方　法

調査対象者と調査方法

本研究は質問紙法調査によっている。福島市内の私立R幼稚園に通う園児の母親を対象に質問紙による調査を行った。回答は無記名とし，プライバシーに配慮した。

調査期間は，1999年10月下旬から11月上旬であった。質問紙を各クラスの担任を通して幼児に配布し，家庭に持ち帰り個別に実施し，その後，担任が質問紙を幼児から回収する方法をとった。

質問紙は，231名に配布し，212名から回答を得た。回収率は91.8％であった。212名の回答のうち既婚女性206名のデータを分析の対象としたが，欠損値があるため，分析によってはデータの数が異なることがある。

質問紙の構成

質問紙は，調査対象者の年齢，性別，子どもの数と年齢，家族形態，就労形態，祖父母からの家事・育児援助，自分専用の車の所有を問うフェイス・シートの他，育児の否定的側面に関する7項目，育児の肯定的側面に関する7項目，夫との関係に関する5項目，友人との関係に関する3項目，日常生活での悩みや心配事を問う10項目等から構成されている。

育児の否定的側面，育児の肯定的側面，夫との関係，友人との関係を問う項目の評定に際しては，いずれも「非常にそう思う」から「全くそう思わない」までの5段階尺度が使用されており，ここでは，「非常にそう思う」を5点，「全くそう思わない」を1点として得点化した。

また，日常生活での悩み事や心配事については，表2に示された10項目のそれぞれに対して，「全く悩んでいない」から「非常に悩んでいる」までの5段階尺度上への評定を求め，「全く悩んでいない」を1点，「非常に悩んでいる」を5点として得点化している。

育児の否定的側面に関する評定には，「子どもができてから，自分の趣味のために外出することが少なくなった」，「自分の関心や時間を育児にとられて視野が狭くなる」，「生活の多くが子どもの要求にあわせるために犠牲にされている」，「育児のため自分のやりたいことができない」，「子どもができてから，以前ほどいろいろなことが楽しめなくなった」，「子どもを育てるために我慢ばかりしている」，「子どもができてから，自分のしたいことがほとんど出来ないでいる」の7項目からなる尺度（範囲：7－35点）が用いられ，また，育児の肯定的側面に関する評定には，「子どもを持って自分も成長した」，「子どもをいとおしいと思う」，「育児は楽しい」，「子どもさえいれば幸せだ」，「自分の中でもっとも重要なのは子どもだ」，「子どもこそ生きがいだ」，「母であることに生きがいを感じる」の7項目からなる尺度（範囲：7－35点）が用いられている。

夫との関係に関しては，「夫は，一緒に子育てをしてくれる」，「子どものことについて夫婦でよく話し合う」，「私たちの夫婦は，仲がよい」，「夫婦で一緒に話し合うことが多い」，「夫は，家事や育児に協力的である」の5項目からなる尺度（範囲：5－25点）が，そして，友人との関係に関しては，「私には，友人が少ない（逆転項目）」，「育児についてよく話し合う友人がいる」，「育児の悩みについて相談することができる友人がいる」の3項目からなる尺度（範囲：3－15点）がそれぞれ用いられている。

結　果

回答者の特徴について

回答者の平均年齢は，34.21歳であり，24歳から45歳までの範囲にあった。就労形態については28名（13.6％）がフルタイムの仕事を持ち，パートタイムが23名（11.2％），そして専業主婦が155名（75.2％）であった。

子どもの数の平均は2.33人で，1人から5人までにあり，子どもの年齢は0歳から18歳までの範囲をとっている。

家族形態については，145名（70.4%）が核家族，配偶者の親との同居が46名（22.3%），自分の親との同居が14名（6.8%），そして配偶者の親とも自分の親とも同居しているとの回答が1名（0.5%）であった。

祖父母からの家事・育児援助については，105名（51.2%）が「あり」と，100名（48.8%）が「なし」と回答している。

自分専用の車を持っているかという質問については，157名（76.2%）が「あり」と，49名（23.8%）が「なし」と回答している。

尺度の信頼性について

育児の否定的側面，肯定的側面のそれぞれの尺度得点に対するクロンバックのアルファ係数は，否定的側面に関しては，.85，肯定的側面に関しては，.74であり，ともに充分に信頼できうる尺度として考えられる。

また，夫との関係，友人との関係のそれぞれの尺度得点に対するクロンバックのアルファ係数は，夫との関係に関しては，.89，友人との関係に関しては，.61であった。友人との関係における信頼性係数が若干低いが，この尺度が3項目から構成されていることを考慮すれば，ともに充分に信頼できうる尺度として考えられよう。

本研究においては，夫との関係尺度に19点以下の評定をした回答者を，夫との関係悪群とし，20点以上を夫との関係良群とした。また，友人との関係尺度に11点以下の評定をした場合を，友人との関係悪群とし，12点以上を友人との関係良と分類した。夫との関係，および，友人との関係からみた回答者の内訳を表1に示した。

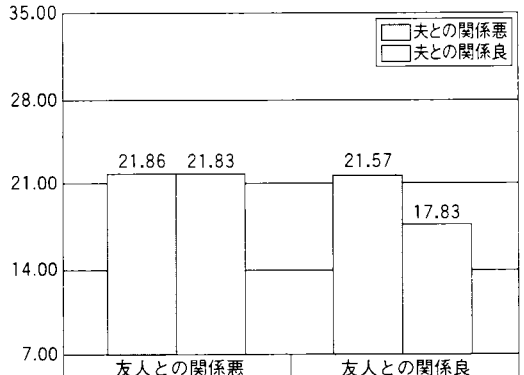
表1　回答者の内訳

	友人との関係悪	友人との関係良
夫との関係　悪	57	48
夫との関係　良	46	55

育児意識に及ぼす夫との関係と友人との関係の影響について

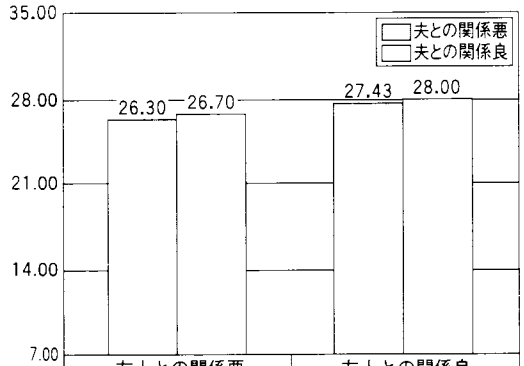
育児の否定的側面への評定の平均値を図1に示した。この値に対する夫との関係と友人との関係を要因とする分散分析の結果，夫との関係の要因と友人との関係の要因に有意な主効果が（各々，$F_{(1,198)}=5.59$，$p<.02$；$F_{(1,198)}=7.18$，$p<.01$），そして，両者の交互作用にも有意な効果が認められている（$F_{(1,198)}=5.41$，$p<.03$）。図1から示されたように，夫との関係も，友人との関係もともに良好な場合に，もっとも育児の否定的な側面を低く評定していることが明らかにされている。

図1　育児の否定的側面への評価



	友人との関係悪	友人との関係良
夫との関係悪	21.86	21.57
夫との関係良	21.83	17.83

図2　育児の肯定的側面への評価



	友人との関係悪	友人との関係良
夫との関係悪	26.30	27.43
夫との関係良	26.70	28.00

育児の肯定的側面への評定の平均値を図2に示した。この値に対する分散分析の結果，夫との関係の主効果は有意ではないが（$F<1$），友人との関係の主効果は有意となっている（$F_{(1,200)}=4.88$，$p<.03$）。ここでは，両者の交互作用効果は有意となっていない（$F<1$）。図2に示されたように，友人との関係が良好な場合には，育児の肯定的側面への評定が高いことが示されている。

日常生活の悩みに及ぼす夫との関係と友人との関係の影響について

表2に日常生活での悩みの平均と夫との関係と友人

との関係を要因とする分散分析の結果を示した。

「自分の仕事について」,「自分の家庭での役割について」については，友人との関係の主効果だけが有意となっており，どちらも，友人との関係が良好な群が悪い群と比べて，自分の仕事や家庭での役割についての悩みの程度を低く評定していることが示されている。

また,「夫との夫婦関係について」,「家族の経済状態について」は，夫との関係の主効果が有意となっているほか，友人との関係の主効果も有意となっている。表2から明らかなように，夫との関係が悪い群よりも良い群において，そして，友人との関係が悪い群よりも良い群において，夫婦関係や経済状態についての悩みの程度を低く評定していることが明らかになっている。

さらに,「子どもの交友関係について」,「配偶者の親との関係について」の2つの項目に対しては，夫との関係と友人との関係のあいだの交互作用効果だけが有意となっている。また,「自分の親との関係について」に関しては，夫との関係と友人との関係の間の交互作用に有意に近い効果が認められている。「子どもの交友関係について」は，夫との関係が良好であっても，友人との関係が悪い場合には，この悩みの平均が高まることが示されている。「配偶者の親との関係」,「自分の親との関係」に対しては，夫との関係と友人との関係がともに良好な場合に，これらの親との関係にかかわる悩みの平均が低いことが示されている。

ここでは,「子どもの性格や行動について」,「家族の健康について」，そして,「自分の将来について」に関しては，夫との関係，友人との関係，両者の交互作用のすべての効果は有意となっていない。

考　察

本研究の目的は，母親の育児意識を否定的側面と肯定的側面とに区別し，それぞれの側面について，夫との関係の性質と友人との関係の性質との関連から検討することにあった。

分析の結果，育児の否定的側面への評価には，夫との関係と友人との関係の交互作用効果が認められ，夫との関係も友人との関係もともに良好な場合に，育児の否定的側面への評定が低くなっていることが示された（図1）。また，育児の肯定的側面への評価には，友人との関係の効果だけが認められ，友人との関係が良好な場合に，育児の肯定的側面を高く評定していることが示されている（図2）。

このように，育児の否定的側面にも育児の肯定的側面へも，友人との関係が大きな影響を及ぼしていることが明らかにされたといえよう。

特に，育児の否定的側面に関して，夫との関係と友人との関係の交互作用効果が認められたことは極めて興味深いといえよう。これまで，比較的個別的に議論されてきたと思われる母親の対人関係要因であるが，今後は，母親を取りまく対人環境として包括的な視点から検討する必要が示されたと考えることができよう。

さらに，日常生活での心配事や悩み事に関しても，夫との関係だけでなく，友人との関係が大きな影響を与えていることが示されている。育児だけでなく，母親の生活の多くの部分において，友人との関係が持つ

表2　日常生活への悩みの評定

	夫との関係悪		夫との関係良		分散分析の結果（*F*値）		
	友人との関係悪	友人との関係良	友人との関係悪	友人との関係良	夫との関係	友人との関係	交互作用
子どもの性格や行動について	2.96	2.94	3.20	2.85	0.23	1.51	1.08
子どもの交友関係について	2.19	2.57	2.83	2.30	1.40	0.22	8.85***
夫との夫婦関係について	2.81	2.57	1.91	1.54	50.10****	5.16*	0.24
自分の親との関係について	1.70	1.78	1.91	1.53	0.02	1.45	3.62†
配偶者の親との関係について	2.47	2.72	2.61	2.17	1.47	0.33	4.00*
家族の健康について	2.56	2.43	2.60	2.62	0.47	0.10	0.2
自分の仕事について	2.81	2.59	2.76	2.23	1.45	5.05*	0.86
自分の家庭での役割について	2.47	2.17	2.30	1.91	1.98	5.06*	0.10
自分の将来について	3.07	2.80	2.78	2.56	2.48	2.09	0.02
家族の経済状態について	3.46	3.04	3.15	2.59	4.56*	7.60**	0.17

† $p<.10$; * $p<.05$; ** $p<.01$; *** $p<.005$; **** $p<.001$

意味が重要なものなのであろう。

本研究においては，母親の育児意識について，夫との関係要因と友人との関係要因に注目して分析した。ただし，実際には，配偶者の親との関係が夫との関係に影響したり，あるいは，母親が就業しているかどうかが，母親の友人関係の拡がりや質を規定しているというような可能性もあろう。これらの変数間の影響関係を考慮した分析が今後必要とされよう。

さらに，氏家（1996）は，これまで育児への否定的側面だけに中心的に焦点を当てていた母親が，劇的に変化し，育児の肯定的な側面に中心的に焦点を当てるようになったという例を示している。このような，育児意識のダイナミックな変化の過程も，今後検討すべき重要な課題であるといえよう（平林・飛田，1998）。

引用文献

青木まり・松井　豊・岩男寿美子　1986　母性意識から見た母親の特徴―ライフ・ステージ，自己評価，充実感との関係から―　心理学研究，**57**，207－213.

原田正文　1993　育児不安を越えて　朱鷺書房

平林秀美・飛田　操　1998　母親の育児意識に及ぼす末子の年齢と夫からのサポート認知の影響　福島大学生涯学習教育研究センター年報，**3**，65－69.

鎌田陽世　1998　現代の母親が抱える母性意識に関する基礎的研究　日本教育心理学会第40回総会発表論文集，29.

神谷哲治　1998　育児期における親の乳児の泣き声に対する認知と育児ストレスとの関係　日本教育心理学会第40回総会発表論文集，27.

柏木恵子　1982　子どもの発達環境としての女性，母親，家庭をめぐる現状と問題　母子研究，**5**，226－245.

牧野カツ子　1982　乳幼児を持つ母親の生活と<育児不安>　家庭教育研究所紀要，**3**，34－56.

大日向雅美　1982　母性意識の発達変容について―母親の教育歴・就労形態・年齢別の分析―　日本教育心理学会第24回総会発表論文集，298－299.

小野けい子　1994　現代日本の母性意識―世代差と職業差の調査より―　発達，**57**，51－58.

斉藤　学　1992　子どもの愛し方がわからない親たち　講談社

佐々木正美　1996　児童精神科医の見る子育て不安　現代のエスプリ，**342**，28－32.

総理府青少年対策本部　1983　幼児を持つ母親の意識に関する調査

氏家達夫　1996　親になるプロセス　金子書房

【付記】　本研究は，庄野一美さん（1999年度福島大学教育学部卒業予定）の卒業論文のデータをあらためて分析し，再構成したものである。卒業論文をご指導いただきました福島大学教育学部（現・東京女子大学文理学部）助教授平林秀美先生には深く感謝いたします。